

## なぜ読書に「ともだち」が必要なのか

奈良 敏行（笈の定有）

定有堂でのわたしの読書には、二つの姿勢があった。本を読む人たちの読書体験に寄り添うものと、もう一つは自分の読書を深める手がかりとして、他者を必要とすることだった。

定有堂教室では、「心理学で、もうおともだち」とか「人文書でおともだち」などの旗印を掲げてきた。前者は心理学の先生を囲んでのお話し会。二十代半ばの人たちが中心だったので、「アイデンティティ・クライシス」（エリックソン）を課題とした。青年期について一緒に考えるというテーマだ。地方で暮らすための自分を、しっかり確立しようという意図があった。その意図は、そのように考えている人たちが数人かたまり合えば、それだけで果たされるように思えた。間に書物も存在するが、それはそれほど重要ではなかった。講師の先生の提案で「持ち寄り夕食会」な

ども盛会だった。

心理学といいながら講師（鳥取大学教授）の専攻が認知心理学だったので、錯視や錯誤などゲーム感覚で楽しめるものでもあった。本が好き、本屋が好き、という人たちだけが手にした、もう本はどうでもいいという緩い集りだった。講師が鳥取を去るまで十年近く続いた。

重なるように途中から始まっていたのが、定有堂教室「読む会」だった。これは人文書を中心とした読書会だった。毎月一冊、哲学、仏教、文化人類学、社会思想など時代と足並みを揃えたものだった。講師の専門が日本史、興味分野が現代思想だった。歴史は資料を発掘するに尽きる。その資料を活かすには思想が必要と、いう方法論が自覚されていた。

講師は日々見つける刺激的な本を紹介するのが楽しく、独演会的なところもあった。だから参加者はきちんと課題本を読んで来なくても、なんの不自由もなかった。それでも参加者のほとんどが読書家で、そこには本を読む人たちの饗宴があった。

わたしは本が読まれているこの風景には至上の喜びを感じたが、自分が本を読むということ自体には興味がなかった。これは不思議なことだが、そんな本屋だったとしか言いようがない。本を読む、書く、売る、という流れの中

には断絶があった。わたしは本を売ることだけが楽しかった。それに加えて本を読む人たちの集まる場をつくり出すことが同様に楽しかった。本が好きな人たちが集まり、その片隅に無言で居つづける時間が幸せだった。

本屋の中に「ともだち」が必要だったのだが、その輪の中にいるよりも、周縁にいる方が好きだった。座敷わらしみたいだと言われたのもこの頃だ。本屋の仕事と読書の耽溺は両立しないと感じていたのだ。とくにそこに覚悟とか決意というものがあつたわけではないが、当然そんなものだと思ひ込んでいた。二十代の終わりの頃に、読書の方へ向かうことは、自分を幸せにしないと気づいていたのかもされない。本を読んで矛盾の中に生きるのに疲れていたのだらう。いずれにしろ、三十歳に近づいた私は、幸せになりたいと、考えを変え始めていたのだ。

本を読んでも幸せにはなれない。でも本を売るということの先には、幸せが待ち受けている。これは正しい考えに思えた。

本屋を始めて三十五年くらい立つた頃、「本屋が読書に追いつかれていく」という言葉にとらわれるようになった。読書会は少人数で読み合い、課題本は意識の高いものだった。その密度の高い読書は読書会だけで十分で、店頭はまた別物だと久しく考え続けていた。ところがなぜかあ

る日、店頭を濃度の深いものにしようと思ひ立つたのだ。時間の流れが変わつたのかも思ひれない。「縮減」という言葉が脳裏に浮かんた。狭くすることの始まりだった。

寺山修司の『書を捨てよ、町へ出よう』は、荒野へ誘う書物だった。そこには「何一つ自分の青年時代に賭けるべきものを持たなかつた者たち」を告発する言葉があつた。賭けに負けたから本屋を始めたのだろうか。解き明かすことの難しい心の動きだと思ふ。しかし、そういう、書を捨てて本屋を始める、という気概の本屋だったのは間違いない。

しかし「本屋が読書に追いつかれる」という心の脈動は、読書は賭けるべき何ものかだという心の折り返しでもあつた。だんだん自分の最新の読書が棚に反映されていくよになつた。読書の脈動の中に入る。そのためには別の意味で「ともだち」が必要だった。店頭で人と出会い、好ききの人たちがとりつかれている本を教わる。多くの場合それは移動するひとたち（旅の人）だった。一期一会で人に寄り添う。そしてメモしながら会話する。いつも定有堂に顔を出す同好の本読みの人に、教わつたばかりの自分で読み込んだ内容を伝える。その人も興味を示し、帰路のJRの中から感想をまとめメールしてくる。自分できちんと読むのだが、読んだだけでは伝えられない。だから語れる

ようにノートにメモをとり、そのメモを見せながら会話するのだった。そういうことも大切なもう一つの「ともだち」だった。

読書になぜ「ともだち」がいるのだろうか。本を読む人たちの側に黙している幸せと、そういう集いとは離れ、一対一で情報を交換する「ともだち」を不可欠とする、そこから始める幸せがそこにあったからだろう。

そうして本屋が読書に追い越されて行った。

2025.0716